

## 選抜区分毎の TOEIC 成績の推移分析

天野哲彦, 樽松理樹, 高橋英也, 江村健介 (岩手県立大学)

選抜区分が異なる入学生が在学中また卒業後にどのようなパフォーマンスを示すかは、選抜制度を設計するうえで、重要な基礎情報である。パフォーマンスを評価するには、GPA、基幹科目の成績、標準化されたコンピテンシーテスト、卒業率・留年率・退学率、在学中と卒業後のアンケートなど様々な指標を併用して分析するのが一般である。本学では、在学学生は全員、入学直後の 4 月から 2 年生の 1 月まで計 5 回 TOEIC を受験する。本稿では、その成績をもとにして、選抜区分毎の学力や学びへ向かう姿勢などを推測し、選抜制度や入学前教育の改善を図る基礎資料を提供したい。

キーワード：選抜区分, 学力推移, 英語, TOEIC, 追跡調査

### 1 はじめに

本学は A 学部 (医療・看護系), B 学部 (福祉・教育系), C 学部 (理工系), D 学部 (総合系) の 4 学部構成である。基本の選抜区分は、AO (総合型選抜), 推薦 (学校推薦型選抜), 一般前期, 一般後期の 4 つである。選抜区分における教科学力試験は、AO (総合型選抜) では課さず、推薦では基礎的な学力確認レベルであり、一般前期と一般後期では共通テストおよび個別学力試験を課す教科学力中心の選抜を実施している。

1 年生は、入学時 (4 月), 1 年前期終了時 (8 月), 1 年後期終了時 (1 月) の計 3 回 TOEIC Bridge® L&R IP を受験し、2 年生は 2 年前期終了時 (8 月) と 2 年後期終了時 (1 月) の計 2 回 TOEIC® L&R IP を受験する。テストの成績は英語のクラス分けに活用される他、英語の成績の一部に算入される。

この TOEIC スコアで示される英語の学力について、学生の学力総体の中での位置づけを考える。共通テスト (共通一次, センター試験) については、先行研究において、英語の得点と総得点との間には他の教科に増して相関があり、英語の得点は、理系・文系を問わない全ての教科に共通の総合的学力を現すと報告されている (池田, 1983 ; 内田・杉澤, 2008, 2009)。英語という教科の習得には特に時間がかかり、粘り強い継続的な学習が必要である。このような学びへ向かう意欲や姿勢を身につけているかが、他の教科の成績にもプラスの影響を与えられられる。

本学には外国語や国際系の 4 年制学部はなく、地方に立地していることから、英語学習へのインセンティブは比較的弱いと考えられる。卒業後に国際的に活躍したいという学生もいるが、総体としては多くない。そのような環境の中で TOEIC の成績を伸ばしていく

学生は、入学時にすでに学びへの姿勢を確立しているか、強い意欲や目的意識をもって入学し、本学が提供するカリキュラムに進んで適合しようとしている学生だと予想される。

以上から TOEIC スコアは、学びへの姿勢を通して、他の教科の成績や、さらには自律的学習者として将来の成長と相関があると想定して分析を行う。

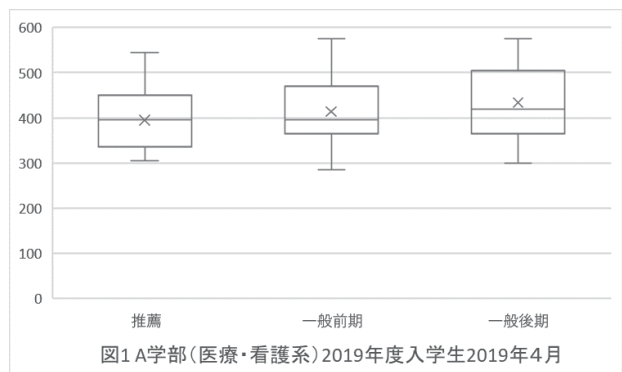
本稿は、2022 年 2 月現在に入手できる最新のデータ (2019 年度入学生) を使って分析した。

### 2 TOEIC 成績推移

#### 2.1 A 学部 (医療・看護系)

A 学部の成績について、実施単位毎に図 1 から図 5 に示す。各図においては、選抜区分毎に、平均、標準偏差、欠席数、受験者数を表形式で示すとともに、得点の箱ひげ図を示す。なお、A 学部では AO (総合型選抜) は実施していない。

	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
推薦	394.81	61.86	0	27
一般前期	414.04	71.57	0	47
一般後期	434.12	82.68	0	17



	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
推薦	399.44	72.21	1	26
一般前期	422.61	64.57	1	46
一般後期	454.38	68.64	1	16

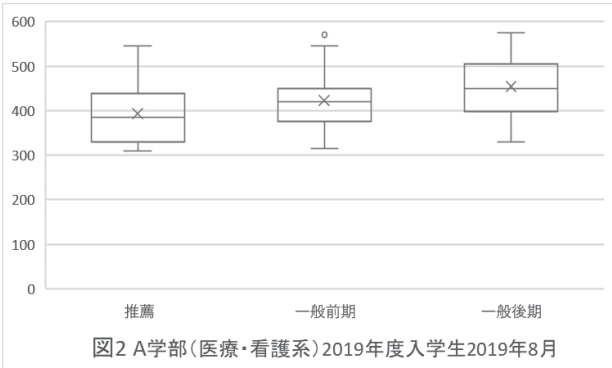


図2 A学部(医療・看護系)2019年度入学生2019年8月

図2において、箱ひげ図の点は外れ値を示す。ここで外れ値は、四分位範囲の1.5倍を超えた値である。以降の図も同様である。

	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
推薦	421.11	93.28	1	26
一般前期	436.41	76.43	1	46
一般後期	501.56	71.47	1	16

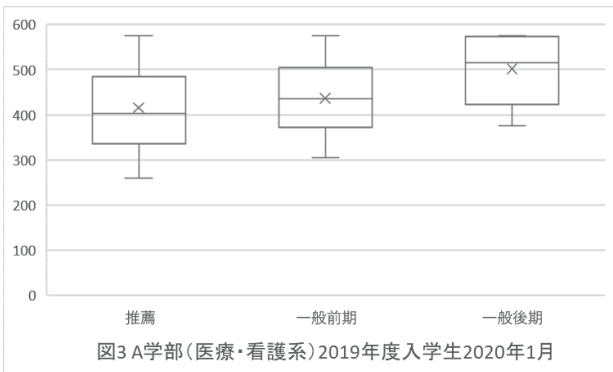


図3 A学部(医療・看護系)2019年度入学生2020年1月

	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
推薦	379.26	78.02	1	26
一般前期	387.72	64.63	1	46
一般後期	413.44	70.81	1	16

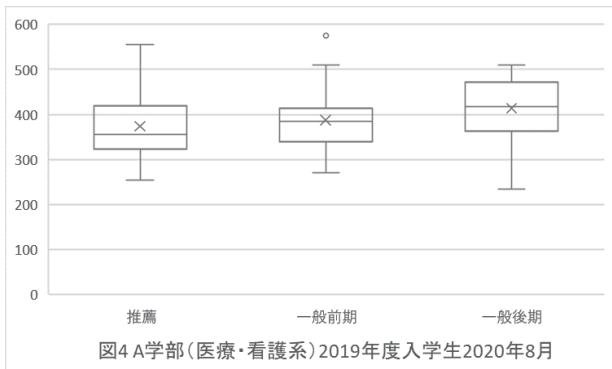


図4 A学部(医療・看護系)2019年度入学生2020年8月

	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
推薦	403.80	98.38	3	24
一般前期	401.30	82.62	1	46
一般後期	445.63	81.41	1	16

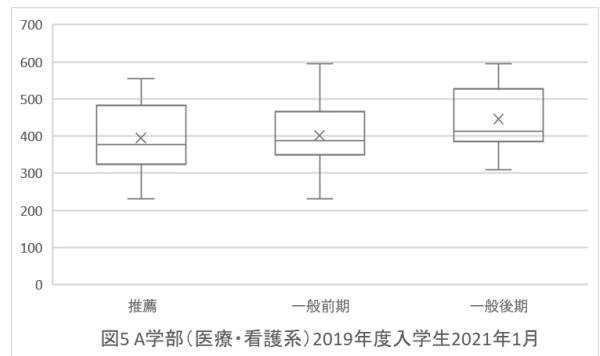


図5 A学部(医療・看護系)2019年度入学生2021年1月

図6に、選抜区分毎の平均点の推移を示す。

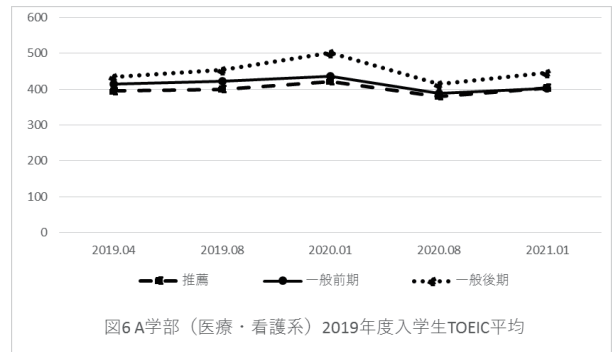


図6 A学部(医療・看護系)2019年度入学生TOEIC平均

## 2.2 B学部(福祉・教育系)

B学部の成績について、A学部と同様に、実施単位毎に図7から図11に示す。なお、B学部ではAO(総合型選抜)入学者は4名と少ないため、報告に含めない。

	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
推薦	349.13	76.12	0	39
一般前期	415.46	63.77	0	49
一般後期	443.13	64.47	0	8

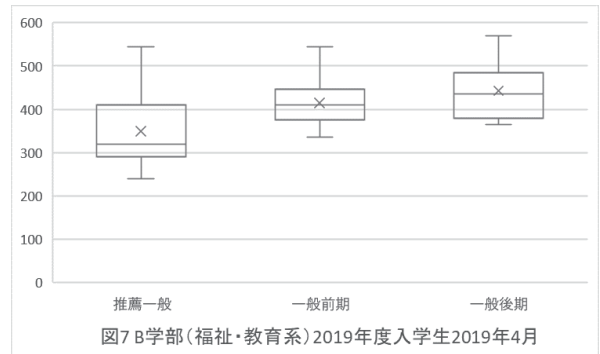
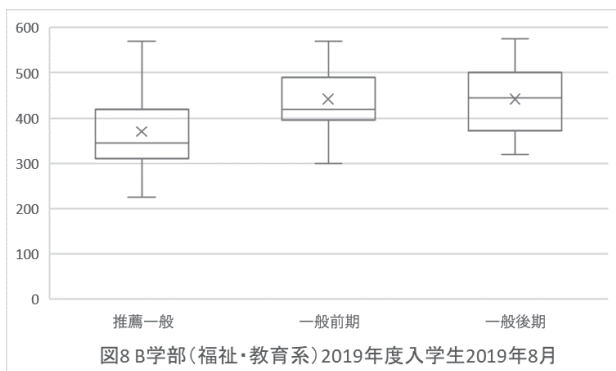


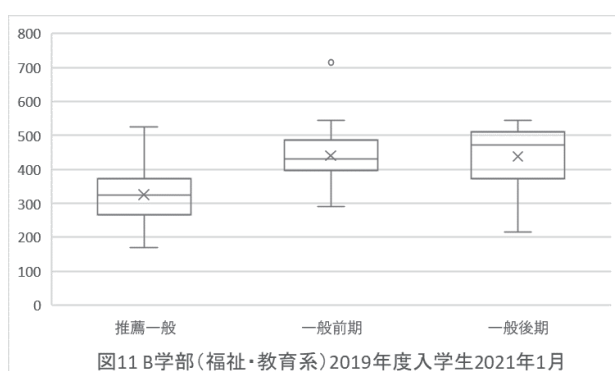
図7 B学部(福祉・教育系)2019年度入学生2019年4月

選抜区分毎の TOEIC 成績の推移分析

	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
推薦	369.38	77.69	0	39
一般前期	439.59	72.15	3	46
一般後期	441.88	77.30	0	8



	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
推薦	326.32	83.63	2	37
一般前期	433.61	95.59	4	45
一般後期	438.33	106.60	0	6



	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
推薦	386.63	72.83	0	39
一般前期	448.73	68.44	3	46
一般後期	496.88	56.73	0	8

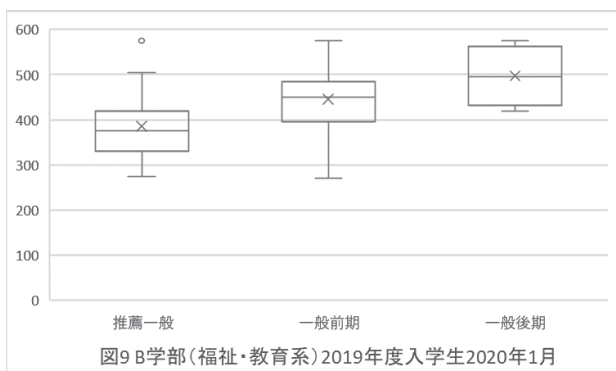
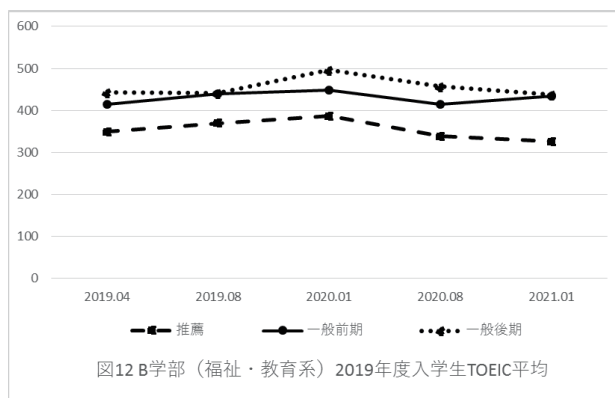
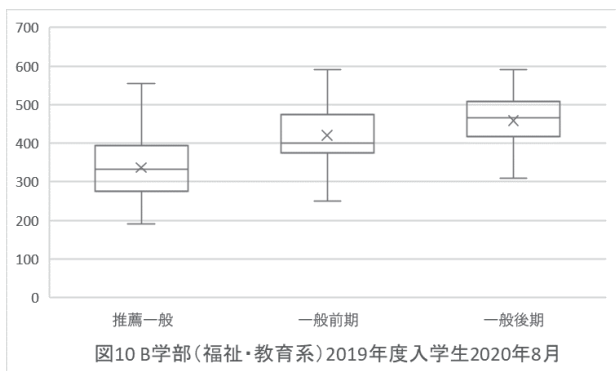


図 12 に、選抜区分毎の平均点の推移を示す。



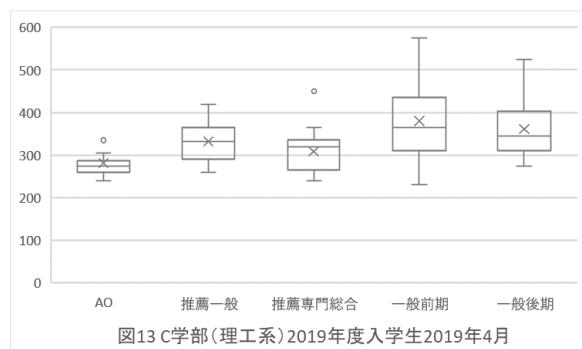
	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
推薦	338.65	84.87	3	36
一般前期	415.27	84.96	4	45
一般後期	458.13	76.03	0	8



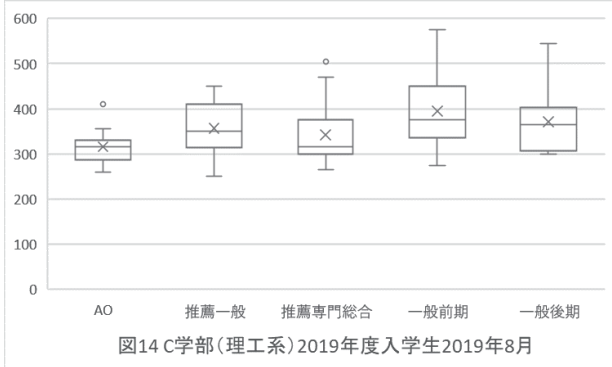
### 2.3 C 学部 (理工系)

C 学部の成績について、実施単位毎に図 13 から図 17 に示す。なお、推薦専門総合は、職業教育を主とする学科又は総合学科出身の高校生を対象とした選抜区分である。

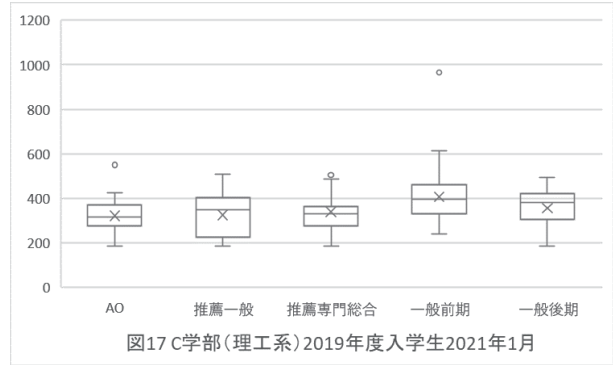
	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
AO	281.11	30.35	0	20
推薦一般	332.33	43.12	0	30
推薦専門総合	308.91	48.68	0	23
一般前期	380.13	87.90	0	77
一般後期	361.56	68.32	0	16



	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
AO	315.50	39.49	0	20
推薦一般	356.50	54.07	0	30
推薦専門総合	342.39	63.21	0	23
一般前期	394.93	80.57	4	73
一般後期	371.54	74.20	3	13



	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
AO	322.37	83.28	1	19
推薦一般	325.67	88.89	0	30
推薦専門総合	339.75	80.02	3	20
一般前期	407.03	117.21	13	64
一般後期	356.25	87.16	4	12



	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
AO	343.68	70.52	1	19
推薦一般	372.67	65.70	0	30
推薦専門総合	349.77	63.92	1	22
一般前期	417.12	80.87	4	73
一般後期	383.85	78.23	3	13

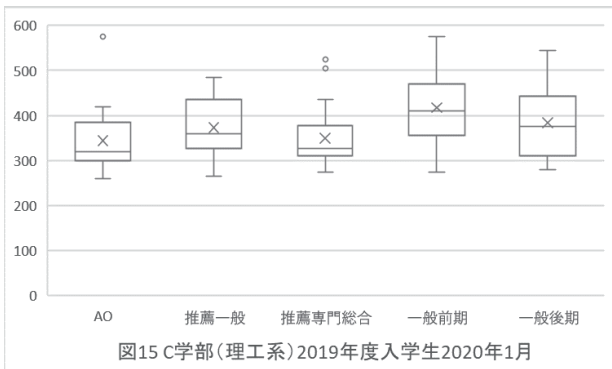
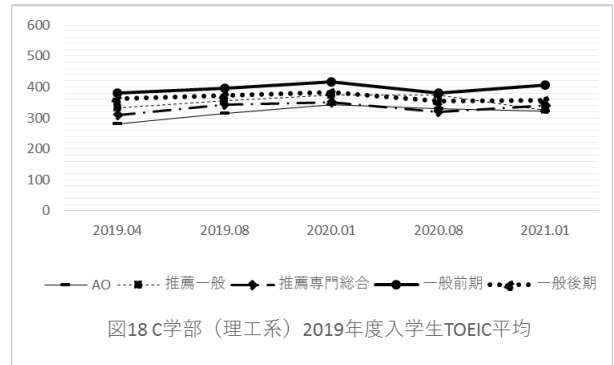
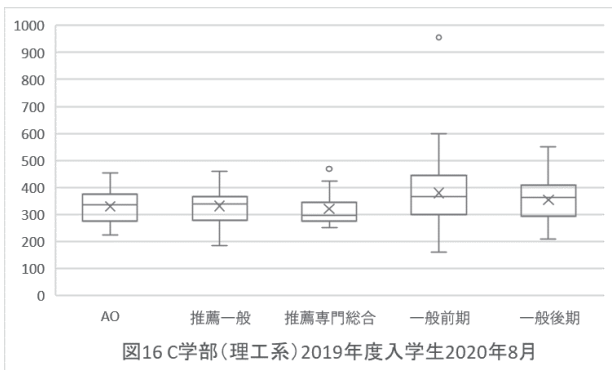


図18に、選抜区分毎の平均点の推移を示す。



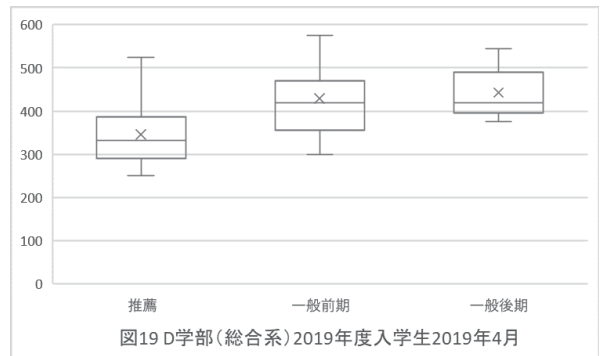
	平均	標準偏差	欠席者数	受験者数
AO	330.26	60.84	1	19
推薦一般	372.67	65.70	0	30
推薦専門総合	320.50	64.98	3	20
一般前期	380.00	116.59	13	64
一般後期	354.29	85.31	2	14



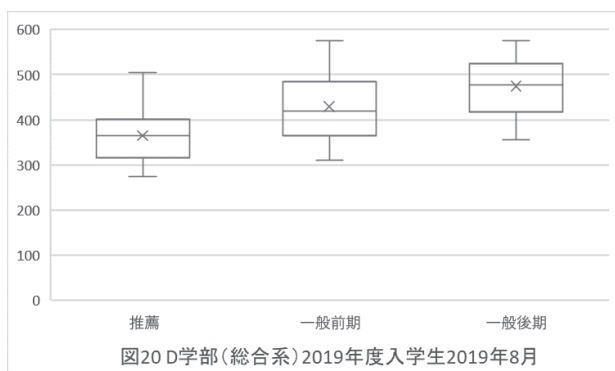
## 2.4 D学部(総合系)

D学部の成績について、実施単位毎に図19から図23に示す。D学部においても、AO(総合型選抜)の入学者が2名と少ないため、B学部同様に本報告には含めない。

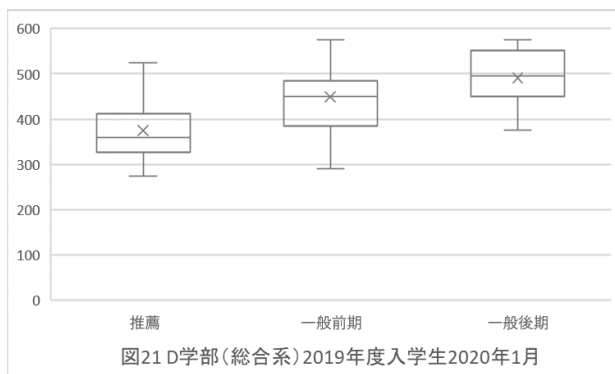
	平均	標準偏差	欠席者数	入学者数
推薦	346.17	64.93	0	30
一般前期	429.09	75.90	0	56
一般後期	442.78	53.62	0	18



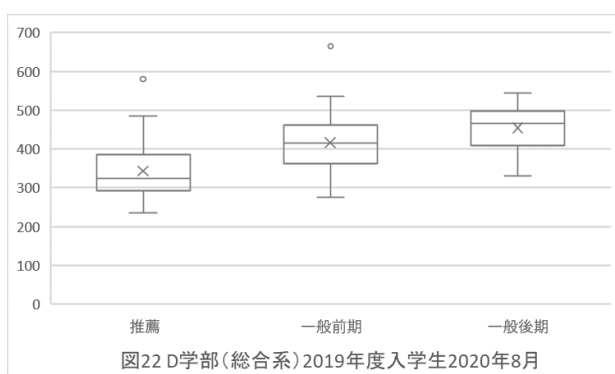
	平均	標準偏差	欠席者数	入学者数
推薦	362.26	65.02	0	30
一般前期	426.16	79.11	1	55
一般後期	474.17	68.03	0	18



	平均	標準偏差	欠席者数	入学者数
推薦	373.06	65.46	0	30
一般前期	445.91	76.17	2	54
一般後期	490.83	59.75	0	18



	平均	標準偏差	欠席者数	入学者数
推薦	342.83	74.92	1	39
一般前期	416.04	82.33	3	53
一般後期	454.72	53.35	0	18



	平均	標準偏差	欠席者数	入学者数
推薦	350.65	91.65	0	40
一般前期	424.44	89.78	3	53
一般後期	468.89	79.14	0	18

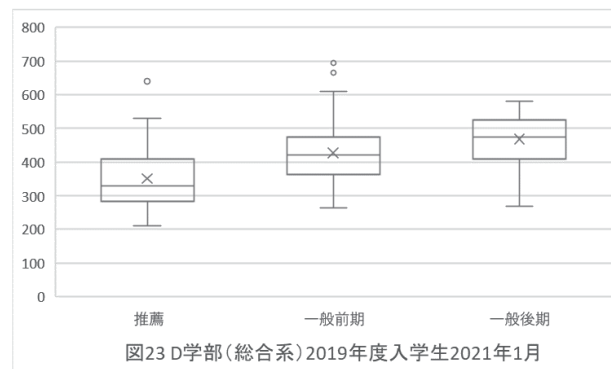
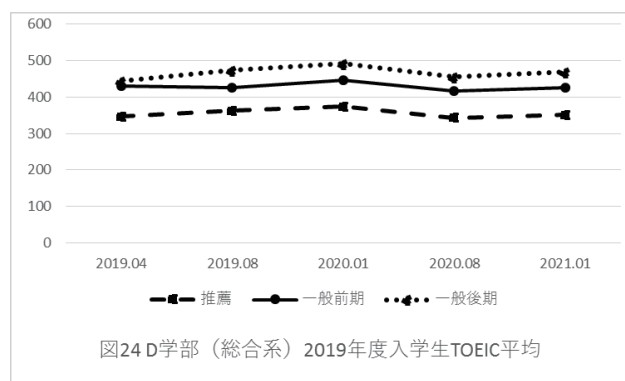


図24に、選抜区分毎の平均点の推移を示す。



### 3 評価・考察

#### 3.1 全学部共通の傾向

全学部で5回のテストを通じ、一般前期・後期合格者がAO(総合型選抜)や推薦の合格者より成績がよい傾向がある。これは、本学のAOと推薦では教科学力試験を基本的には課していないことから、合格者はもともと英語力が低い可能性があることや、合格発表から入学まで4ヶ月ほどの学習ブランクがあることが関係していると考えられる。

また、全学部で第1回テスト(1年生4月)から第3回テスト(1年生1月)にかけて上昇傾向が見られる。以前のカリキュラム下ではこの期間にスコアの低下が見られていた(高橋ほか, 2010)が、カリキュラム改編によりeラーニングによる学習などを取り入れたことが功を奏している(江村・高橋, 2019, 2020; 高橋・江村, 2019)。

第4回テスト(2年生8月)では一様に低下傾向が見られる。これは、2ヶ月間という長期間の春休みが入ることの影響が考えられる。また、第3回まではTOEIC Bridge® L&R IPであるのが、第4回ではTOEIC® L&R IPになる。この2つのテストは換算表を使って標準化されるが、後者は試験時間が2倍となり題材はビジネス現場に近づいたものとなる(一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会,



2022) )。そのことが本学学生には不利に働いている可能性もある。あるいは、単に初めてのテストに慣れていないことがマイナス要因になっているとも予想できる。これに対し、第 5 回 (2 年生 1 月) には再度スコアが上昇する傾向が見られる。ただし、B 学部の推薦と C 学部の推薦 (一般) にはその傾向は見られない。その原因について今後の研究が必要である。

標準偏差については、次第に大きくなり、第 5 回がとくに大きい値となる。また、外れ値も多くなる傾向が見られる。これは、選抜区分毎に学力水準の近い学生が入学してくるが、入学後の経過によって学力差が広がることを意味する。大きく伸びる学生については、とくに英語が必要となる将来展望 (就職や留学) や、本学での学び全体への意欲が影響していると考えられる。この点については精査の必要がある。

一般前期と一般後期を比較すると、C 学部のみ後期が低い。これは、センター試験の英語が選択であり、個別試験でも英語がないことが関連すると見られる。

### 3.2 学部の特徴

A 学部 (医療・看護系) のみは他学部と異なる特徴がある。第 1 回 (1 年生 4 月) から推薦と一般選抜との平均スコアの差が小さいまま推移し、第 5 回 (2 年生 1 月) では推薦が一般前期を上回っている。これは、A 学部 (医療・看護系) の推薦では、学力水準が比較的高く目的意識もある学生が入学し、本学への「当てはまり感」を持って意欲的に学んでいる結果とみなすことができる。

また、推薦と一般選抜とのスコアの差に注目すると、第 1 回 (1 年生 4 月) について、A 学部 (医療・看護系) と C 学部 (理工系) はそれが小さいのに対して、B 学部 (福祉・教育系) と D 学部 (総合系) は大きい。この違いは、第 2 回以降も続いている。

その理由としては、A 学部と C 学部が推薦合格者に対して入学前教育を実施しているのに対して、B 学部と D 学部が実施していないことも関係していると考えられる。入学前教育は学力の底上げだけでなく、学びに向かう姿勢や意欲、目的意識を高めることにも貢献している可能性がある。ただし、入学前教育が学力に及ぼす影響については、入学前教育実施前後でテストを実施するなど、厳密な検証が必要である。

### 4 おわりに

本稿では、本学 1, 2 年生の TOEIC スコアに基づく英語力の推移から、選抜区分毎の学力や学びへ向かう姿勢の特性を推測した。その結果から選抜方法や入

学前教育の改善について示唆が得られた。今回は 2019 年度入学生のみを対象に分析したが、今後は他年度入学生も加えて分析することで精度向上を図る。また、テストの欠席者を考慮に入れた分析も行う必要がある。もともと成績が低位の学生が欠席、休学、退学することで、全体の平均が上昇している可能性や、逆に成績が高位の学生が他大学へ編入や再入学して平均点が下がっている可能性もある。欠席、休学、退学など学生個人の動向も考慮に入れて分析を続けたい。

また、英語力と他教科の成績の関係 (GPA や主要教科の成績) も確認する必要がある。さらに、第 5 回テスト (2 年生 1 月) で顕著に見られる、飛び抜けて好成绩の学生の意欲の源泉を調べることに取り組む。

### 参考文献

- 江村 健介・高橋 英也 (2019). 「eラーニングを用いた完全自習型科目「英語基礎演習Ⅲ・Ⅳ」— 現状と今後の課題について—」岩手県立大学高等教育推進センター紀要『リベラル・アーツ』14, 1-20
- 江村 健介・高橋 英也 (2020). 「学習管理システムから見る英語e-learning の有効性について — 二期連続受講における前・後期の違いに焦点を当てて —」岩手県立大学高等教育推進センター紀要『リベラル・アーツ』15, 1-19
- 池田 央 (1983). 「共通1次試験の教科・科目間の相関」『大学入試フォーラム』2, 54-61
- 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (2022). 「TOEIC®Tests と TOEIC Bridge®Tests って何が違うの?」, <https://www.iibc-global.org/toeic/corpo/contents/comparison.html> (2022年3月20日アクセス)
- 高橋 英也・Cornelia Daniela Lupsa・佐藤 智子 (2010). 『岩手県立大学のプレイスメント・テスト (TOEIC Bridge) の結果に関する報告書』岩手県立大学高等教育推進センター, 35
- 高橋 英也・江村 健介 (2019). 「主体的な学びを引き出す英語カリキュラムと TOEIC®Program の活用」『2019 TOEIC® セミナー 報告書』一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC), 19-27, [https://www.iibc-global.org/library/default/toeic/corpo/seminar\\_event/pdf/TOEICseminar\\_2019\\_0914.pdf](https://www.iibc-global.org/library/default/toeic/corpo/seminar_event/pdf/TOEICseminar_2019_0914.pdf) (2022年3月21日アクセス)
- 内田 照久・杉澤 武俊 (2008). 「大学入試センター試験で測定される教科学力の構造の布置」『日本教育心理学会第50回総会発表論文集』, 292
- 内田 照久・杉澤 武俊 (2009). 「教科学力の関係の布置と歴史的な構造変化」『日本教育心理学会第51回総会発表論文集』, 152